論　文

自己卑下的帰属錯誤の日韓文化比較心理学的研究

齊　藤　　勇[*1]
遠　藤　みゆき[*2]
荻　野　七　重[*3]

キーワード：自己卑下的帰属、自己高揚的帰属、日韓、比較文化

序

認知した事象の原因の帰属傾向には認知者の所属する文化による影響があり、文化間の帰属傾向には差異があると考えられる。欧米とは異なった文化に属する日本の帰属研究者にとって、これは当然のことのように思われる。しかし、帰属研究を中心的に行ってきた欧米の研究者は、このような文化差があることにはあまり注目せず、帰属傾向の文化差の本格的研究は、他の社会心理学の分野と同じく、社会心理学の潮流が、普遍的理論の追求から、文化相対主義的研究に変わる20世紀末まで待たなければならなかったといえよう。

帰属研究は Heider, F. に始まる。Heider, F. & Simmel, M. (1944) による実験と Heider, F. (1958) の著作『the psychology of interpersonal relations』に基礎をおくが、帰属理論が社会心理学の主要なテーマとなったのは、Jones, E. E. & Danis, K. F. (1965) および Kelley, H, H. (1967) 以降である。1960年代後半ははちょうど心理学全体の流れが行動主義から認知主義に重心を移していくなかで、社会心理学においても、認知的アプローチに注目が集まり、帰属理論はその格好のテーマとなったといえる。

帰属研究の主なテーマは帰属プロセスの理論化であるが、その理論化に大きな役割をになう分野として、帰属錯誤の問題がとりあげられている。そして、帰属錯誤を生じる個人的な認知のバイアスが注目されるようになった。元々、帰属理論は、Heider の『the psychology of interpersonal relations』のベースになっているナイブー・サイコロジーにもとづいているため、ごく普通の人々の認知傾向を基礎としている。このごく普通の人々は本人が意識しているかどうかは別にして、当然、その認知傾向は文化の影響下にある。このため帰属傾向は、その文化のもつ特性の影響を受け、バイアスがかかると考えられる。アメリカ人の帰属傾向と日本人の帰属傾向は異なることが予測できる。しかし、前述したよう

＊1　立正大学心理学部教授
＊2　品川区教育相談センター
＊3　白梅学園短期大学

に帰属研究の出発当初は、このような帰属傾向の文化差はさして注目されなかった。そのことは、帰属錯誤の分類への命名からもうかがえる。Fraser, C. & Burchell, B. (2001) は、一般的帰属錯誤として、基本的帰属錯誤、行為者―観察的帰属錯誤、偽コンセンサス帰属錯誤、究極的帰属錯誤、自己奉仕的バイアスをあげている。そして、基本的帰属錯誤は、その名前の示す通り、最も重要な基本的エラー傾向であるとしている。しかし、この錯誤は、本当に人類に共通の基本的で根本的な錯誤傾向であるのかという疑問が、欧米文化に属さない研究者には当然と思えるが、社会心理学の研究方向全体が文化相対性に重点を移す1990年代になってはじめて着目されるようになったといえる。

基本的帰属錯誤とは、Fraser, C. & Burchell, B. によれば、他者の行動を原因帰属するとき、状況的要因を割り引いて、その他者の個人的特性の関与を大きく考えることである。この基本的帰属錯誤とは、それが基本的であるが故の相応性バイアスの別称である。相応性帰属バイアスとは Kelley, H, H. の帰属の共変原理の相応性に由来する。つまり、極端な表現をすると Lord, C. G. (1997) が述べるように、ある人の言葉や行動が状況的要因によって拘束されていることが分かっているときでさえ、そのとき起こった出来事はその人の性格や態度や意図に原因によって生じたのであるとする帰属傾向である。欧米の社会心理学者は、この相応的帰属バイアスが生じる条件を研究し、その範囲を限定する研究をしてきたが、それが効を奏しないくらい、この帰属錯誤の影響は大きく、少なくても、欧米社会では、このバイアスはビルトインされている、と言及されている (Fletcher, G. J. O. & Ward, C.1988, Jones, E. E. 1990)。そのことは、Miller, A. G., Jones, E. E., & Hinkle, S. (1981) の実験のように被験者の言動が実験者から指示されていることが、明確であるにもかかわらず、その言動の原因が当の被験者に帰属されることに、明瞭に示されている。

なぜ、この錯誤はそれほど強力なのか、それについて Gilbert, D. T., & Malone, P. S. (1995) は、この相応性バイアスは、当人にとって費用効果が高いからとし、次の３つの理由をあげている。第一は、相応的に認知することにより状況をコントロールできる。第二に原因を他者に帰属することにより、自分は関係なくなる。第三に欧米社会では、ある人の行動はその人の内的要因によって生じる、ということに価値をおいているからであるとしている。そして、相応性バイアスが生じる原因として、次の４項目をあげている。

⑴ 状況要因の見過ごし (状況要因が見えなかったり、見えても効力をもつと思わなかったりする傾向)
⑵ 非現実的期待 (人は状況要因によっては動かないと思ってしまう傾向)
⑶ 行動―人関連性の過大評価 (行動は行った人に起因する自発的行為であるとする傾向)
⑷ 調整不実行 (出来事はまず人に帰属され、それから調整することになるが、その調整を行わない傾向)

前述したようにこの相応性バイアスは、欧米社会では、基本的とされる。しかし、最近の比較文化的社会心理学では、それが人類共通の意味の“基本的”ではなく、欧米社会に限定された基本的であり、非西欧的文化においては、欧米社会ほど相応性バイアスがみられないことが証明されつつある (Myers, D. G. 1999)。特に Choi, I. & Nisbett, R. E. (1988) の米韓学生の帰属の比較研究や Miller, C. T. (1984) のインドのヒンデュー人の調査からそのことが分かる。韓国人やヒンデュー人はアメリカ人のようには出来事を個人に帰属せず、状況的帰属をすることを明らかにしている。

さて、この相応性バイアスの文化比較が本論のテーマの一つであるが、文化比較する以前に、アメリ

カの研究者があげている一般的帰属錯誤のなかにすでに、個人への帰属バイアスを示さない状況が示唆されている。それは、行為者―観察者帰属錯誤である。Watson, D. (1982) は、これは、行為者―観察者ではなく、自己―他者帰属錯誤である、との命名の変更を求めているが、確かにその方が正確に現象を証明している、と思われる。行為者―観察者帰属錯誤は、Jones, E. E. & NisbettR. E. (1971) により指摘された帰属錯誤である。この帰属錯誤は、人は、他者が関連した出来事について原因帰属するときは、原因を割増して帰属すること、一方、自分自身が関係した出来事について原因帰属するときは、一転、相応性を割り引き、原因を自分ではなく、周囲の状況に起因させる傾向である。つまり、ここでは相応性バイアスは生じない、あるいは弱められるのである。なぜ、行為者―観察者帰属錯誤において相応性バイアスが生じにくいかについては Nisbett, R. E. & Ross, L. (1980) の自他に対する知識量の差によるという説明や Storms, M. D. (1973) の自他の視点の相違による顕著性の違いによる説明が一般的である。

ところで、Nisbett, R. E. & Ross, L. のようなクールな認知的アプローチだけでは、帰属錯誤の問題全てが説明されるわけではないことが徐々に明らかにされてきている。特に一般的帰属錯誤のなかの自己奉仕的バイアスにおいては、そのことが顕著である。

自己奉仕的バイアスは、別名、動機的バイアスとも呼ばれ、クールな認知的アプローチに対し、動機や感情といったホットな心理的メカニズムを加味して、帰属錯誤をとらえていくアプローチである。自己奉仕バイアスは、遂行結果について成功したり、良い結果の場合は、その原因を自分自身に帰因し、失敗したり、悪い結果の場合は、自分以外の人や状況にその原因を帰因する傾向を指す (Campbell, W. K. &Sedikides, C. 1999)。この自己奉仕的バイアスの生起に関しては、認知的説明と動機的説明がなされている。Ross, L. (1977) や Taylor, J. & Riess, M. (1989) は認知的説明として社会的情報処理プロセスにおいて、人は常に自分が成功をすることを期待しているので、成功したときは、外的要因よりもその期待に沿って内的要因に帰因する傾向をもっているとしている。これは Kelley の共変の原理により説明できる。当人が成功が一般的であると考えているとすると、成功は弁別性が高く、一貫性が高い。このため、内的に帰属されることになる。他方、失敗はまれであると考えていると、失敗は弁別性が高く、一貫性が低い。このため、外的に帰属されることになるといえよう。一方、動機的説明としては、Greenberg, J., Pyszczynsik, T. A. & Solomon, S. (1982) は、人は自尊心の維持、高揚動機やまた他者への印象操作から、自己奉仕バイアスが生じるとしている。Brown, J. D. & Roger, R. J. (1991) は、この自己奉仕バイアスは極めて一般的でしかも強力であるとしているが、社会心理学において比較文化的アプローチが盛んになって以来、この自己奉仕バイアスにも文化差があることが注目されてきている。特に日本を含むアジアにおいては、自己奉仕的バイアスは、弱いとされている (Lee, Y. T. & Seligam, M. E. P.1997)。　その説明として、欧米は個人主義に対してアジアは集団主義であるため、個人よりも集団の成果や調和が強調されるからだとされている。

アジア文化圏に含まれる日本における帰属研究者は、はやくから日本人の帰属傾向が欧米とは異なる点を指摘している。鹿内啓子 (1984) は、Jones & Nisbett の仮説と日本での実験結果を比較し、日本人は、自分の行動結果に関して高い評価を避け、控え目な帰属を表明するとしている。北山忍・高木浩人・松本寿弥 (1995) は、日本人を被験者とした研究をレヴューして、日本人の帰属傾向は、自己奉仕的バイアスとは逆の方向にあり、それは自己批判的、あるいは自己卑下的な帰属傾向であるとしている。

Markus, H. R. & Kitayama, S.（1991）によれば、人は自己を肯定的に評価しようとするが、何が肯定的かは文化により異なるし、欧米型の独立的自己の場合、ユニークさ、自己主張が評価されるため自己高揚的帰属傾向が生じ、他方、相互依存的自己をもつアジア型では、協調性が評価されるため、他者を高揚し自己を卑下する帰属傾向が生じるとしている。村本由紀子・山口勧（1997）は、日本人は集団の中で、自らについては自己卑下し、他方、自集団については集団奉仕的帰属を行うとしている。日本人は集団を通して自己高揚しているといえるかもしれない。この他者高揚による自己高揚は社会的アイデンティティ理論（Oakes, P. J. & Turner, J. C.1990）を適用すると自分がアイデンティファイしている他者や集団を他者高揚することになることを推論させることになる（Miller, S. A. 1995 ; Mullen, B. & Riordan, C. A. 1988)。また、失敗して他者を非難するとき、そのターゲットは嫌いな人に向けられること（Silvia, P. J. & Duval, T. S. 2001）も理解できよう。この傾向は Cialdini, R. B., Borden, R. J.,Throne, A.,Walker, M. R.,Freeman, S., & Sloan, L. R.（1976）の BIRG から推察され、西欧文化においてもこの傾向は支持されるといえよう。

ところで、日本人の自己卑下傾向の研究は、北山忍・高木浩人・松本寿弥に指摘されているように、主に実験室のなかで架空の課題への帰属で実証されている。そこで、齊藤勇・遠藤みゆき・荻野七重(2000）は、日本人大学生を被験者として、大学生にとって現実の課題である大学入試、恋愛などを課題として、帰属傾向を調べている。その結果、現実の課題においても、自己卑下傾向が強くみられることが明らかになった。と同時に、友人に対する帰属は明確な他者高揚的帰属がなされており、集団としての自己高揚傾向がうかがえた。本論文においては、アジアの一員である韓国の大学生と日本人大学生の帰属傾向を調べ、日韓の帰属傾向の類似性と相違性を明らかにすることを目的とした。アジアの一国である韓国は、欧米からは、日本同様に、その文化は集団主義的とみなされている。しかも、日本よりも儒教の影響が大きく、家父長を重んじる伝統（小菅幸一、2002)、それに、日常的会話においても、「ウリナラ（私たちの国)」という言葉を繁用し、国と親族に強い社会的アイデンティティを持っていると予測される韓国人は、現代の日本人のように、さめた目で国を見て、親族のつき合いも疎になっている国民よりも、より集団主義的といえるかもしれない。このように考えると、日本以上に、自己卑下的帰属がなされるかもしれない。しかし、一方で、韓国人は、日本人よりもプライドの高い国民とされ(高橋徹、2003)、優劣に敏感であるともいわれている。この場合は、原因帰属においては、自己高揚的帰属が多用されることが予測され、日本人のようには、容易に自己卑下的帰属をしないのではないか、とも思える。このような両国の帰属傾向の類似性と相違性を現実の課題に基づいて、比較して、検討することも本研究の目的である。

方　法

１．調査対象　日本の大学生85名（男子40名、女子45名）、韓国の大学生85名（男子41名、女子44名)。

２．調査法　　質問紙調査法を用いた。質問紙は次のような構成の独自の調査表を作成した。

１）課題　大学入学試験（以下、入試と略す)、恋愛、就職。

２）成否　各課題の成功、失敗。

３）帰属対象者　自分自身、好きな友達、嫌いな人の３者。

4）帰属要因　齊藤勇・荻野七重（1997）齊藤勇・遠藤みゆき・荻野七重（2000）に準じて帰属要因は次の10項目とした。
a 素性、b 能力、c 性格、d 出身校、e 努力、f 対応、g 課題、h 状況、i 運、j 運命
5）回答法　各項目ごとの100%分割法。
6）質問　調査上の質問文の内容はおおよそ次のとおりである。入試、恋愛、就職など自分の生活の中で起こっている出来事の成功と失敗について考えること。生じていないことについても想像して考えること。そして、その成功失敗の原因、理由が何であったか（何であるか）を a〜j の理由の中から選択すること。そのとき原因理由は１つでも２つでもそれ以上でもよいこと。各項目内のトータルがそれぞれ100%になるようにすること。たとえば、２つだったら70%と30%といったように重みづけをして、それを数値（%）で記入すること。次に、好きな友達と嫌いな人を１人ずつ選び、その２人の成功失敗の原因について同様に回答すること。
3．手続き　大学の授業において、上記質問紙を配布し、回答させ、回収した。記名式の集団法である。

結　果

課題別、帰属対象者別、成否別に各要因への配分率の平均値を求め、比較を行った。課題別の結果は、表１－表３に、帰属対象者別結果は表４－表６に示されている。ここでは課題別に結果を見ていく。

１．入試の帰属

自分自身、好きな友達、嫌いな人が、入試に成功あるいは失敗した場合の、日本人学生と韓国人学生の各帰属要因の値に対して t 検定を行った。その結果を自分自身、好きな友達、嫌いな人の順に検討していく。また、それぞれの場合をグラフに表したものが図１〜図18である。

１）自分自身の場合

表１、図１に示されるように、日本人は自分が入試に成功した原因を i 運（26.90%）に帰する傾向が一番高かった。韓国人も i 運（19.76%）に高く帰属したが、その値は日本人の方が高く、統計的にも有意な差がみられた（t=1.978 p<.10)。韓国人が最も高く帰属したのは、e 長期的努力（21.18%）であった。日本人も i 運に次いで e 長期的努力（18.57%）に高く帰属している。その次に高く帰属したのは日本人、韓国人ともに、b 能力であった。この３帰因で全体の60%以上をカバーしている。また、上記３要因に比べ、配分比率はかなり低いが、韓国人は日本人よりも c 性格や f その場の対応に帰属する値が有意に高かった（t=1.734 p<.10、t=2.201 p<.05)。それに対して日本人はこれも配分比率は低いが、韓国人よりも g 課題に帰属する値が有意に高かった（t=3.258 p<.01)。

表１、図２に示されるように失敗した場合、日本人も韓国人も一番多く帰属したのは e 長期的努力であった。両国の学生とも成功の場合と同じく e 努力、i 運、b 能力の３要因が上位を占めている。ただし、韓国の学生に比較して日本の学生の成功と失敗の違いが顕著である。日本の学生では成功の場合、i 運に帰属する比率が高かったが、失敗では、e 長期的努力（32.88%）に最も多く帰属し、その値は韓国よりも大きく、統計的にも有意な差がみられた。(t=2.069 p<.05)。日本人、韓国人とも、e 長期的努

力の次に高く帰属したのがｉ運、その次がｂ能力であるという傾向は同じであった。また、成功と同様にｃ性格やｆその場の対応に帰属する値が韓国人の方が有意に高かった（t=2.418 p<.05、t=2.039 p<.05)。それに加えて、韓国人はｈ周囲の状況に帰属する値も有意に高かった（t=2.497 p<.05)。それに対して、配分比率は低いが成功同様、日本人は韓国人よりもｇ課題に帰属する値が有意に高かった(t=2.602 p<.05)。

２）好きな友達の場合

表１、図３に示されるように、日本の学生も韓国の学生も同じように、好きな友達が入試に成功した場合の原因として最も多くｅ長期的努力（日本29.28%　韓国32.06%）をあげている。次に高いのがｂ能力で、この２つの帰属要因で、全体の50%を超えていて、その配分比率に関して日韓の間に有意な差は認められない。しかしながら、自分自身の場合と比べての数値の変化を見ると、日本人学生のｉ運への帰属の減少が韓国よりも顕著である。また、配分比率は低いが、日本人は、自分自身の場合と同様に、韓国人よりもｇ課題に原因を求める値が有意に高かった（t=2.694 p<.01)。

表１、図４に示されるように、好きな友達が、失敗した場合は成功の場合と同様、日本人も韓国人ともにｅ長期的努力に最も多く帰属した。日本人が次に多く帰属したのがｉ運であり、この２要因でやはり全体の50%以上をカバーしている。その値は韓国人の方が有意に高かった（t=2.196 p<.05)。韓国の学生では、ｉ運への帰属とｂ能力への帰属の値はほとんど差がなく、３要因に大きく帰属された。このためｂ能力への帰属は日本の学生ではその差が大きく、ｉ運への帰属は日本人の方が有意に高かった(t=2.036 p<.05)。また配分比率は低いが、ｆその場の対応とｈ周囲の状況への帰属は自分自身の場合と同様、韓国人の方が有意に高かった（t=1.783 p<.05　t=3.590 p<.01)。日本人は、自分の場合と同様に、韓国人よりもｇ課題に帰属する値が有意に高かった（t=3.612 p<.01)。

３）嫌いな人の場合

表１、図５に示されるように日本の学生も韓国の学生も、嫌いな人が入試に成功した場合その原因をとび抜けて高くｉ運に帰属していた。大学入試のｉ運への帰属は概して高いが、嫌いな人の成功の場合がその比率が最も高い。その次に帰属したのはｅ長期的努力、ｂ能力であり、いずれも日韓の間に有意差は見られない。それ以外では配分比率は低いが韓国人はａ素性に原因を帰属する値が日本人よりも有意に高く（t=3.966 p<.01)、それに対して、日本人は、自分、好きな友達の場合と同様に、韓国人よりもｇ課題に帰属する値が有意に高かった（t=3.430 p<.01)。

表１、図６に示されるように大学入試に失敗した場合は、日本人も韓国人もｂ能力、そしてｅ長期的努力の２つの要因に大きく原因を求めている。次にｃ性格に帰属する傾向も高く、上記３つの要因への帰属が大半を占めている。ここではｉ運の値が著しく少ない。また、配分比率は少ないが、ｆその他の対応、ｈ周囲の状況への帰属は韓国人の方が高く、(t=2.227 p<.05, t=2.170 p<.05）ｇ課題への帰属は日本人の方が有意に高かった（t=2.056 p<.05)。この傾向は自分自身や好きな友達の場合にも、成功の場合に一貫して見られる特徴である。

２．恋愛の帰属

自分自身、好きな友達、嫌いな人が、恋愛に成功あるいは失敗した場合の、日本人学生と韓国人学生の各帰属要因の値に対してｔ検定を行った。その結果を自分自身、好きな友達、嫌いな人の順に示した

ものが表２であり、それぞれの場合をグラフに表したものが図７～図12である。

１）自分自身の場合

表２、図７に示されるように、日本の学生も韓国の学生も恋愛に成功した原因の最たる要因は群を抜いてｃ性格としている。次に高い値は両国の学生ともｊ運命だった。しかし、それに次ぐ要因には日韓の間に違いが見られ、配分比率は低いが、日本ではｉ運、ｆその場の対応に帰属する傾向が高く、韓国との間に有意な差が見られた（t=2.567 p<.05　t=2.567 p<.05)。韓国ではｊ運命に次いでｈ周囲の状況、ｂ能力、ｅ長期的努力が同じような比率で続くが、その値に日韓の間で差は認められない。

表２、図８に示されるように日本人も韓国人も、恋愛に失敗した場合、その原因を成功と同様、第一にｃ性格に求めている。その傾向は成功の場合を上回っており、その分ｊ運命への帰属が減少し、他の要因間の差が縮小している。日韓の比較では、配分比率は低いが、ａ素性に帰属する値は日本人の方が、ｈ周囲の状況に帰属する値は韓国人の方が有意に高かった（t=1.700 p<.10, t=3.731 p<.01)。

２）好きな友達の場合

表２、図９に示されるように好きな友達が恋愛に成功した場合は、自分自身の場合と同様に、日本人も韓国人もその原因を群を抜いてｃ性格に求めた。その次には、自分の場合と異なり、ｊ運命ではなくｂ才能に求めている。この点でも日韓は同じ傾向を示した。差が見られたのは、配分比率は低いが、ｈ周囲の状況、ｊ運命への帰属であり、韓国人の方が有意に高かった（t=2.197 p<.05, t=1.763 p<.10)。

表２、図10に示されるように、恋愛に失敗した場合の原因もやはり群を抜いてｃ性格に求められた。しかし次に高いのは、韓国ではｈ周囲の状況、日本ではｉ運である。ｈ周囲の状況に帰属する値は韓国人の方が有意に高く（t=3.000 p<.01)。ｉ運への帰属は日本の学生のほうが高い（t=2.533 p<.05)。また、ｇ課題に帰属する値は日本人の方が有意に高かった（t=1.935 p<.10)。

３）嫌いな人の場合

表２、図11に示されるように、嫌いな人が恋愛に成功した場合の原因を日本人も韓国人もｉ運に高く帰属した。その値は日本人の方は群を抜いて高かった（t=1.773 p<.10)。次に高いのは、日本ではｃ性格、ｆその場の対応、ｇ課題であり、韓国ではｃ性格、ｈ周囲の状況、ｂ能力である。ｆその場の対応、ｇ課題は日本の学生が高く（t=2.457 p<.05　t=3.823 p<.01)、ｈ周囲の状況、ｂ能力では韓国の方が有意に高かった（t=2.419 p<.05　t=2.324 p<.05)。そのほかにｂ長期的努力、ｄ出身校への帰属は韓国の方が有意に高かった（t=1.931 p<.10, t=2.088 p<.05)。

表２、図12に示されるように、嫌いな人が恋愛に失敗した原因については、日本人も韓国人もｃ性格に高く帰属した。その値は日本人38.64%、韓国人43.35%と群を抜いて非常に高かった。次いで日韓ともｂ能力への帰属が高い。また配分比率は低いが、ｅ長期的努力、ｈ周囲の状況に帰属する値は韓国の方が有意に高かった（t=2.336 p<.05, t=3.481 p<.01)。それに対して、ｇ課題に帰属する値は日本人の方が有意に高かった（t=2.868 p<.01)。

３．就職の帰属

自分自身、好きな友達、嫌いな人が、入試に成功あるいは失敗した場合の、日本人学生と韓国人学生の各帰属要因の値に対してｔ検定を行った。その結果を自分自身、好きな友達、嫌いな人の順に示したものが表３であり、それぞれの場合をグラフに表したものが図13～図18である。

1）自分自身の場合

表３、図13に示されるように自分が就職に成功した場合（想定上ではあるが）、その原因を日本人も韓国人もｂ能力に最も高く帰属した。特に韓国人は群を抜いてｂ能力に帰属した。２番目に高い帰属は、日本の学生ではｉ運であり、韓国の学生ではｅ長期的努力であった。ｅ長期的努力に帰属する値は韓国人の方が有意に高く（t=2.894 p<.01）。それに対して、ｉ運、およびｊ運命に帰属する値は日本人の方が有意に高かった（t=2.892 p<.01, t=2.714 p<.01）。

表３、図14に示されるように失敗した場合、その原因も成功と同様、日韓ともにｂ能力に最も高く帰属した。韓国人の場合は群を抜いていた。次いで、日本ではｉ運、ｄ出身校、ｅ長期的努力が高く、韓国ではｅ長期的努力、ｄ出身校が高い。ｉ運に帰属する値は日本人の方が有意に高かった（t=1.783 p<.10）。それに対して、配分比率は低いが、ｈ周囲の状況に帰属する値は韓国人の方が有意に高かった（t=1.741 p<.10）。

2）好きな友達の場合

表３、図15に示されるように、日本人も韓国人も、好きな友達が就職に成功した場合、その原因を、自分自身の場合と同様、ｂ能力に求めた。特に日本人は群を抜いてｂ能力に帰属した。その次に高かったのは、日本人ではｉ運で、韓国人の場合ｅ長期的努力であった。ｅ長期的努力は日韓の間に有意差が認められた（t=3.204 p<.01）。また、ｊ運命への帰属は日本人学生の方が高く、韓国との間に有意差が認められた（t=2.489 p<.05）。

表３、図16に示されるように好きな友達が就職に失敗した場合についてはとび抜けて高い帰属要因はみられない。その中で、日本人は原因をｉ運に帰属する割合が最も高かった。韓国学生ではｂ能力に帰属する割合が最も高い。ｉ運命の値は日本人が有意に高く（t=2.901 p<.01）、ｂ能力に帰属する値は韓国の学生が有意に高かった（t=2.267 p<.05）。また、ｈ周囲の状況に帰属する値は韓国人の方が有意に高く（t=3.717 p<.01）、ｇ課題に帰属する値は日本人の方が有意に高かった（t=3.999 p<.01）。

3）嫌いな人の場合

表３、図17に示されるように嫌いな人が就職に成功した場合は、日本人も韓国人も、とび抜けて高くその原因をｉ運に求めた。しかしその値は日本人の方が有意に高かった（t=2.109 p<.05）。次いで、日本ではｂ能力、ｄ出身校、ｆその場の対応に、韓国ではｂ能力、ａ素性、ｄ出身校、ｅ長期的努力に帰属する傾向が高く、ａ素性とｅ長期的努力では韓国のほうが有意に高いことを示した（t=3.106 p<.01, t=2.265 p<.05）。また、配分比率は低いが、ｇ課題への帰属は、ここでも日本の学生の方が韓国に比べて高かった（t=2.941 p<.01）。

表３、図18に示されるように、嫌いな人が就職に失敗した場合、その原因を、日本人も韓国人も同じようにｂ能力とｃ性格に帰因している。また、ｅ長期的努力にも高く帰属した。しかしａ素性に帰属する値は配分比率は低いが、日本人の方が有意に高かった（t=1.980 p<.10）。それに対して、ｈ周囲の状況に帰属する値は韓国人の方が有意に高かった（t=2.717 p<.01）。

表１　大学入試についての帰属傾向の日韓比較（平均値と標準偏差）

課　題	対象者	成　否	国		a素性	b才能	c性格	d出身校	e長期的努力	fその場の対応	g課題	h周囲の状況	I運	j運命
大学入試	自分自身	成功	日本	平均値	2.1	15.24	6.53	5.68	18.57	4.03	6.19	8.48	26.9	6.34
				標準偏差値	7.72	21.99	13.27	15.54	22.79	9.34	15.44	17.09	24.81	12.2
			韓国	平均値	3.24	17.69	10.47	2.2	21.18	8.02	0.76	9.87	19.76	6.8
				標準偏差値	8.58	21.62	16.38	6.7	24.88	13.97	2.38	13.23	22.53	16.71
				t			1.734+			2.201*	3.258**		1.978+	
		失敗	日本	平均値	2.5	14.4	7.2	4.64	32.88	5.6	5.36	5.07	17.11	5.3
				標準偏差値	8.63	20.2	14.53	12.53	31.77	11.55	14.74	14.71	24.18	15.6
			韓国	平均値	2.71	15.59	13.35	4.12	23.53	9.44	1.06	11	15.65	5.68
				標準偏差値	9.21	27.95	18.35	9.92	26.72	12.9	3.46	16.12	20.91	13.27
				t			2.418*		2.069*	2.039*	2.602*	2.497*		
	好きな友達	成功	日本	平均値	3.1	23.45	11.18	3.26	29.28	5.75	4.37	3.16	13.46	3.02
				標準偏差値	9.68	21.89	18.22	9.9	28.34	14.26	10.94	9.19	21.46	9.56
			韓国	平均値	2.29	24.53	7.41	1.71	32.06	9.24	1	5.41	14.71	1.65
				標準偏差値	8.08	23.28	14.3	5.95	27.79	13.15	3.99	10.5	19.75	6.47
				t							2.694**			
		失敗	日本	平均値	0.76	10.29	9.24	2.85	28.72	7.09	9.88	3.43	24.59	3.18
				標準偏差値	5.5	16.62	17.81	8.35	27.91	14.34	19.6	10.1	28.85	8.76
			韓国	平均値	1.94	16.82	10.71	2.06	24.35	11.35	1.76	11.59	16.88	2.53
				標準偏差値	6.64	21.89	16.82	5.94	24.9	16.79	7.06	18.39	19.91	8
				t		2.196*				1.783*	3.612**	3.590**	2.036*	
	嫌いな人	成功	日本	平均値	1.88	15.24	5.35	7.88	16.65	3.47	7.59	5.48	32.34	4.17
				標準偏差値	7.94	20.53	14.26	16.12	23.95	7.48	17.77	14.75	33.77	11.43
			韓国	平均値	11.12	17.06	5	5.59	17.71	5.12	0.82	7.41	27.41	2.76
				標準偏差値	19.95	21.43	9.32	11.69	24.73	10.41	3.85	13.53	30.17	11.09
				t	3.966**						3.430**			
		失敗	日本	平均値	2.56	28.02	16.63	1.86	26.49	4.65	4.36	2.1	9.2	3
				標準偏差値	10.87	29.33	22.46	5.43	29.48	13.69	12.6	11.79	17.83	9.86
			韓国	平均値	2.53	24.88	16.47	2	23.82	9.71	1.29	6.12	8.76	4.41
				標準偏差値	9.62	26.94	21.71	8.39	25.3	15.89	5.68	12.38	17.88	15.53
				t						2.227*	2.056*	2.170*		

+p<.10　*p<.05　**p<.01

表２　恋愛についての帰属傾向の日韓比較（平均値と標準偏差）

課　題		成　否	国		a素性	b才能	c性格	d出身校	e長期的努力	fその場の対応	g課題	h周囲の状況	I運	j運命
恋愛	自分自身	成功	日本	平均値	5.11	8.14	24.77	2.03	5.95	11.92	3.93	7.51	14.43	16.8
				標準偏差値	17.12	14.96	24.46	7.6	11.64	20.85	10.01	15.46	21.84	22.57
			韓国	平均値	2.53	10.59	29.82	1.02	9.8	5.45	3.73	11.39	5.47	19.88
				標準偏差値	6.88	16.98	23.37	3.68	19.36	10.77	9.52	15.38	10.14	24.9
				t						2.567*			3.462**	
		失敗	日本	平均値	8.04	10	30	2.2	3.88	13.63	7.02	3.69	10.48	10.96
				標準偏差値	20.65	19.88	28.08	11.93	9.32	20.54	15.39	11.44	19.77	18.12
			韓国	平均値	3.82	9.71	29.12	2	5.82	12.47	4.41	12.82	6.47	13.35
				標準偏差値	9.5	16.98	25.18	7.8	13.99	19.8	10.25	19.42	12.17	21.15
				t	1.700+							3.731**		
	好きな友達	成功	日本	平均値	5.06	16.76	33.47	0.53	6.71	9.13	3.71	4.47	10.47	6.19
				標準偏差値	17.7	22.36	26.33	3.09	18.28	18.19	9.26	12.86	19.5	16.18
			韓国	平均値	2.71	16.65	30.41	1.06	9.71	9.12	2.71	8.59	7.88	11.18
				標準偏差値	10.05	23.27	26.04	4.57	16.01	15.76	8.22	11.54	16.1	20.36
				t								2.197*		1.763+
		失敗	日本	平均値	4.24	7.97	22.97	0.7	7.56	13.26	9.07	6.69	16.34	11.59
				標準偏差値	17.78	16.62	27.52	4.55	18.58	22.75	15.62	12.41	26.19	21.7
			韓国	平均値	4.53	10.82	27.76	1.32	9.18	10.35	4.88	13.42	7.87	9.15
				標準偏差値	12.48	19.41	23.07	5.07	15.21	15.85	12.54	16.63	16.47	17.6
				t							1.935+	3.000**	2.533*	
	嫌いな人	成功	日本	平均値	7.38	6.43	13.93	0.6	4.76	12.32	11.7	6.9	28.42	7.53
				標準偏差値	20.31	14.03	20.46	5.46	14.27	20.69	23.03	14.35	31.81	18.67
			韓国	平均値	8.29	12.29	16.35	3.35	9.76	5.88	1.71	13.41	20.35	8.47
				標準偏差値	17.99	18.51	20.52	10.87	19.1	12.28	6.66	20.17	27.17	14.35
				t		2.324*		2.088*	1.931+	2.457*	3.823**	2.419*	1.773+	
		失敗	日本	平均値	3.93	13.87	38.63	1.31	3.99	11.37	6.67	2.86	8.33	9.16
				標準偏差値	14.56	25.09	30.83	9.91	10.86	19.44	14.86	7.58	17.87	22.3
			韓国	平均値	2.94	13.06	43.35	1.65	9	9.41	1.65	9.35	7.06	8.88
				標準偏差値	9.27	23.5	68.72	5.9	16.49	15.21	6.09	15.43	16.32	19.4
				t					2.336*		2.868**	3.481**		

+p<.10　*p<.05　**p<.01

表３　就職についての帰属傾向の日韓比較（平均値と標準偏差）

課　題		成　否	国		a素性	b才能	c性格	d出身校	e長期的努力	fその場の対応	g課題	h周囲の状況	I運	j運命
就職	自分自身	成功	日本	平均値	7.38	24.06	10	8.38	8.94	7.47	2.88	5.19	19.44	7.09
				標準偏差値	20.59	24.46	14.45	14.88	15.5	11.52	8.56	12.31	19.27	18.84
			韓国	平均値	4.35	25.76	13.12	11.53	17	10.12	1.35	4.24	11.29	1.24
				標準偏差値	9.69	24.4	18.08	17.29	20.11	16.42	4.84	8.47	16.71	3.69
				t					2.894**				2.892**	2.714**
		失敗	日本	平均値	6.47	20.51	7.37	14.17	12.44	11.31	3.72	4.01	17.12	3.18
				標準偏差値	13.44	24.77	11.97	22.9	20.51	16.56	9.78	8.92	22.03	12.27
			韓国	平均値	3.65	23.76	10.71	13.71	14.53	9.88	2.41	6.88	11.41	2.94
				標準偏差値	10.19	23.74	16.35	19.76	19.06	13.91	7.58	12	18.46	12.66
				t								1.741+	1.783+	
	好きな友達	成功	日本	平均値	5.26	24.42	12.95	10.81	11.82	7.31	3.33	4.87	14.23	5.06
				標準偏差値	15.77	22.85	17.75	21.76	20.31	15	12.86	13.24	23.59	15.12
			韓国	平均値	4.59	30.27	11.76	9.12	23.06	5.94	0.82	3.94	9.76	0.71
				標準偏差値	11.6	24.84	16.2	17.81	24.41	10.62	4.07	9.39	15.1	2.9
				t					3.204**					2.489*
		失敗	日本	平均値	2.31	10.9	9.04	12.74	9.59	13.65	8.33	3.78	21.79	6.43
				標準偏差値	8.4	16.25	20.34	23.93	19.44	19.55	16.7	9.54	28.02	16.52
			韓国	平均値	4.06	17.88	13.53	12.59	14.65	10.24	0.65	11.59	11.06	3.76
				標準偏差値	11.96	22.79	18.37	18.12	19.73	16.31	3.16	16.6	17.58	13.95
				t		2.267*					3.999**	3.717**	2.901**	
	嫌いな人	成功	日本	平均値	4.62	13.85	5.26	10.1	5.86	10.83	5.26	8.72	31.47	4.22
				標準偏差値	15.01	18.46	10.99	22.47	12.42	19.23	12.66	17.83	33.2	12.01
			韓国	平均値	14	15.94	6.18	13.12	11.29	7.12	0.76	5.18	21.24	5.18
				標準偏差値	23.04	21.66	13.4	22.01	17.93	13.96	4.85	11.32	29.77	19.6
				t	3.106**				2.265*		2.941**		2.109*	
		失敗	日本	平均値	5.19	24.22	17.66	6.74	13.84	9.74	5.19	1.67	11.75	4.14
				標準偏差値	16.19	28.02	22.16	19.21	24.57	16.99	17.59	6.16	21.52	11.56
			韓国	平均値	1.35	24.94	20.71	9	14.41	7.41	2	6.06	8.12	6
				標準偏差値	5.53	25.49	23.81	19.01	21.54	13.06	6.13	13.34	17.32	20.17
				t	1.980+							2.717**		

+p<.10　*p<.05　**p<.01

表４　３課題について自分自身に対する帰属傾向の日韓比較（平均値と標準偏差）

対　象	課　題	成　否	国		a素性	b才能	c性格	d出身校	e長期的努力	fその場の対応	g課題	h周囲の状況	I運	j運命
自分自身	大学入試	成功	日本	平均値	2.1	15.24	6.53	5.68	18.57	4.03	6.19	8.48	26.9	6.34
				標準偏差値	7.72	21.99	13.27	15.54	22.79	9.34	15.44	17.09	24.81	12.2
			韓国	平均値	3.24	17.69	10.47	2.2	21.18	8.02	0.76	9.87	19.76	6.8
				標準偏差値	8.58	21.62	16.38	6.7	24.88	13.97	2.38	13.23	22.53	16.71
				t			1.734+			2.201*	3.258**		1.978+	
		失敗	日本	平均値	2.5	14.4	7.2	4.64	32.88	5.6	5.36	5.07	17.11	5.3
				標準偏差値	8.63	20.2	14.53	12.53	31.77	11.55	14.74	14.71	24.18	15.6
			韓国	平均値	2.71	15.59	13.35	4.12	23.53	9.44	1.06	11	15.65	5.68
				標準偏差値	9.21	27.95	18.35	9.92	26.72	12.9	3.46	16.12	20.91	13.27
				t			2.418*		2.069*	2.039*	2.602*	2.497*		
	恋愛	成功	日本	平均値	5.11	8.14	24.77	2.03	5.95	11.92	3.93	7.51	14.43	16.8
				標準偏差値	17.12	14.96	24.46	7.6	11.64	20.85	10.01	15.46	21.84	22.57
			韓国	平均値	2.53	10.59	29.82	1.02	9.8	5.45	3.73	11.39	5.47	19.88
				標準偏差値	6.88	16.98	23.37	3.68	19.36	10.77	9.52	15.38	10.14	24.9
				t						2.567*			3.462**	
		失敗	日本	平均値	8.04	10	30	2.2	3.88	13.63	7.02	3.69	10.48	10.96
				標準偏差値	20.65	19.88	28.08	11.93	9.32	20.54	15.39	11.44	19.77	18.12
			韓国	平均値	3.82	9.71	29.12	2	5.82	12.47	4.41	12.82	6.47	13.35
				標準偏差値	9.5	16.98	25.18	7.8	13.99	19.8	10.25	19.42	12.17	21.15
				t	1.700+							3.731**		
	就職	成功	日本	平均値	7.38	24.06	10	8.38	8.94	7.47	2.88	5.19	19.44	7.09
				標準偏差値	20.59	24.46	14.45	14.88	15.5	11.52	8.56	12.31	19.27	18.84
			韓国	平均値	4.35	25.76	13.12	11.53	17	10.12	1.35	4.24	11.29	1.24
				標準偏差値	9.69	24.4	18.08	17.29	20.11	16.42	4.84	8.47	16.71	3.69
				t					2.894**				2.892**	2.714**
		失敗	日本	平均値	6.47	20.51	7.37	14.17	12.44	11.31	3.72	4.01	17.12	3.18
				標準偏差値	13.44	24.77	11.97	22.9	20.51	16.56	9.78	8.92	22.03	12.27
			韓国	平均値	3.65	23.76	10.71	13.71	14.53	9.88	2.41	6.88	11.41	2.94
				標準偏差値	10.19	23.74	16.35	19.76	19.06	13.91	7.58	12	18.46	12.66
				t								1.741+	1.783+	

+p<.10　*p<.05　**p<.01

表５　３課題について好きな友達に対する帰属傾向の日韓比較（平均値と標準偏差）

対　象	課　題	成　否	国		a素性	b才能	c性格	d出身校	e長期的努力	fその場の対応	g課題	h周囲の状況	I運	j運命
好きな友達	大学入試	成功	日本	平均値	3.1	23.45	11.18	3.26	29.28	5.75	4.37	3.16	13.46	3.02
				標準偏差値	9.68	21.89	18.22	9.9	28.34	14.26	10.94	9.19	21.46	9.56
			韓国	平均値	2.29	24.53	7.41	1.71	32.06	9.24	1	5.41	14.71	1.65
				標準偏差値	8.08	23.28	14.3	5.95	27.79	13.15	3.99	10.5	19.75	6.47
				t							2.694**			
		失敗	日本	平均値	0.76	10.29	9.24	2.85	28.72	7.09	9.88	3.43	24.59	3.18
				標準偏差値	5.5	16.62	17.81	8.35	27.91	14.34	19.6	10.1	28.85	8.76
			韓国	平均値	1.94	16.82	10.71	2.06	24.35	11.35	1.76	11.59	16.88	2.53
				標準偏差値	6.64	21.89	16.82	5.94	24.9	16.79	7.06	18.39	19.91	8
				t		2.196*				1.783*	3.612**	3.590**	2.036*	
	恋愛	成功	日本	平均値	5.06	16.76	33.47	0.53	6.71	9.13	3.71	4.47	10.47	6.19
				標準偏差値	17.7	22.36	26.33	3.09	18.28	18.19	9.26	12.86	19.5	16.18
			韓国	平均値	2.71	16.65	30.41	1.06	9.71	9.12	2.71	8.59	7.88	11.18
				標準偏差値	10.05	23.27	26.04	4.57	16.01	15.76	8.22	11.54	16.1	20.36
				t								2.197*		1.763+
		失敗	日本	平均値	4.24	7.97	22.97	0.7	7.56	13.26	9.07	6.69	16.34	11.59
				標準偏差値	17.78	16.62	27.52	4.55	18.58	22.75	15.62	12.41	26.19	21.7
			韓国	平均値	4.53	10.82	27.76	1.32	9.18	10.35	4.88	13.42	7.87	9.15
				標準偏差値	12.48	19.41	23.07	5.07	15.21	15.85	12.54	16.63	16.47	17.6
				t							1.935+	3.000**	2.533*	
	就職	成功	日本	平均値	5.26	24.42	12.95	10.81	11.82	7.31	3.33	4.87	14.23	5.06
				標準偏差値	15.77	22.85	17.75	21.76	20.31	15	12.86	13.24	23.59	15.12
			韓国	平均値	4.59	30.27	11.76	9.12	23.06	5.94	0.82	3.94	9.76	0.71
				標準偏差値	11.6	24.84	16.2	17.81	24.41	10.62	4.07	9.39	15.1	2.9
				t					3.204**					2.489*
		失敗	日本	平均値	2.31	10.9	9.04	12.74	9.59	13.65	8.33	3.78	21.79	6.43
				標準偏差値	8.4	16.25	20.34	23.93	19.44	19.55	16.7	9.54	28.02	16.52
			韓国	平均値	4.06	17.88	13.53	12.59	14.65	10.24	0.65	11.59	11.06	3.76
				標準偏差値	11.96	22.79	18.37	18.12	19.73	16.31	3.16	16.6	17.58	13.95
				t		2.267*					3.999**	3.717**	2.901**	

+p<.10　*p<.05　**p<.01

表６　３課題について嫌いな人に対する帰属傾向の日韓比較（平均値と標準偏差）

対　象	課　題	成　否	国		a素性	b才能	c性格	d出身校	e長期的努力	fその場の対応	g課題	h周囲の状況	I運	j運命
嫌いな人	大学入試	成功	日本	平均値	1.88	15.24	5.35	7.88	16.65	3.47	7.59	5.48	32.34	4.17
				標準偏差値	7.94	20.53	14.26	16.12	23.95	7.48	17.77	14.75	33.77	11.43
			韓国	平均値	11.12	17.06	5	5.59	17.71	5.12	0.82	7.41	27.41	2.76
				標準偏差値	19.95	21.43	9.32	11.69	24.73	10.41	3.85	13.53	30.17	11.09
				t	3.966**						3.430**			
		失敗	日本	平均値	2.56	28.02	16.63	1.86	26.49	4.65	4.36	2.1	9.2	3
				標準偏差値	10.87	29.33	22.46	5.43	29.48	13.69	12.6	11.79	17.83	9.86
			韓国	平均値	2.53	24.88	16.47	2	23.82	9.71	1.29	6.12	8.76	4.41
				標準偏差値	9.62	26.94	21.71	8.39	25.3	15.89	5.68	12.38	17.88	15.53
				t						2.227*	2.056*	2.170*		
	恋愛	成功	日本	平均値	7.38	6.43	13.93	0.6	4.76	12.32	11.7	6.9	28.42	7.53
				標準偏差値	20.31	14.03	20.46	5.46	14.27	20.69	23.03	14.35	31.81	18.67
			韓国	平均値	8.29	12.29	16.35	3.35	9.76	5.88	1.71	13.41	20.35	8.47
				標準偏差値	17.99	18.51	20.52	10.87	19.1	12.28	6.66	20.17	27.17	14.35
				t		2.324*		2.088*	1.931+	2.457*	3.823**	2.419*	1.773+	
		失敗	日本	平均値	3.93	13.87	38.63	1.31	3.99	11.37	6.67	2.86	8.33	9.16
				標準偏差値	14.56	25.09	30.83	9.91	10.86	19.44	14.86	7.58	17.87	22.3
			韓国	平均値	2.94	13.06	43.35	1.65	9	9.41	1.65	9.35	7.06	8.88
				標準偏差値	9.27	23.5	68.72	5.9	16.49	15.21	6.09	15.43	16.32	19.4
				t					2.336*		2.868**	3.481**		
	就職	成功	日本	平均値	4.62	13.85	5.26	10.1	5.86	10.83	5.26	8.72	31.47	4.22
				標準偏差値	15.01	18.46	10.99	22.47	12.42	19.23	12.66	17.83	33.2	12.01
			韓国	平均値	14	15.94	6.18	13.12	11.29	7.12	0.76	5.18	21.24	5.18
				標準偏差値	23.04	21.66	13.4	22.01	17.93	13.96	4.85	11.32	29.77	19.6
				t	3.106**				2.265*		2.941**		2.109*	
		失敗	日本	平均値	5.19	24.22	17.66	6.74	13.84	9.74	5.19	1.67	11.75	4.14
				標準偏差値	16.19	28.02	22.16	19.21	24.57	16.99	17.59	6.16	21.52	11.56
			韓国	平均値	1.35	24.94	20.71	9	14.41	7.41	2	6.06	8.12	6
				標準偏差値	5.53	25.49	23.81	19.01	21.54	13.06	6.13	13.34	17.32	20.17
				t	1.980+							2.717**		

+p<.10　*p<.05　**p<.01

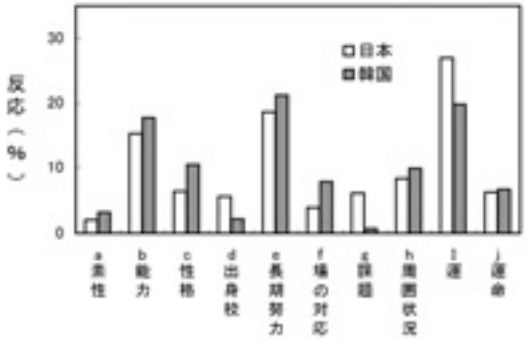

図１　大学入試における自分自身の成功の帰属

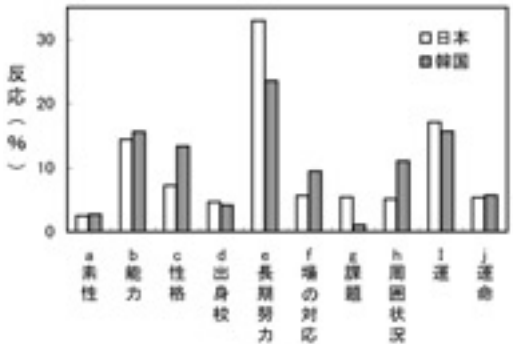

図２　大学入試における自分自身の失敗の帰属

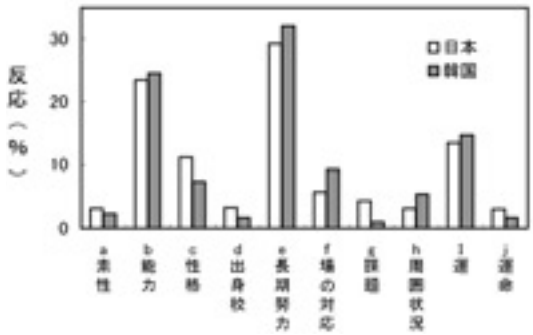

図３　大学入試における好きな友達の成功の場合

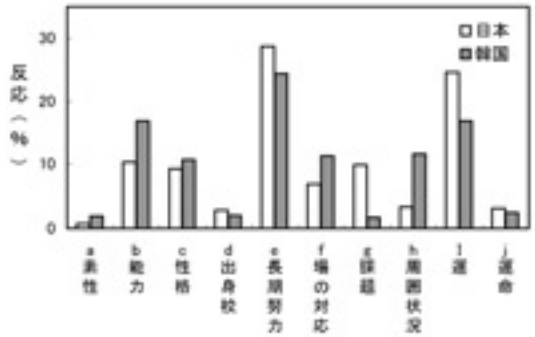

図４　大学入試における好きな友達の失敗の帰属

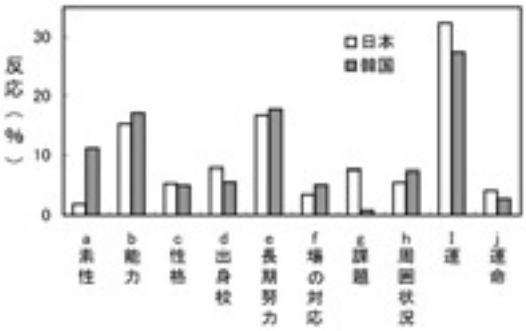

図５　大学入試における嫌いな人の成功の帰属

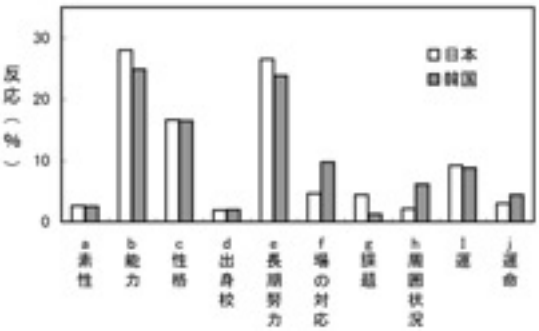

図６　大学入試における嫌いな人の失敗の帰属

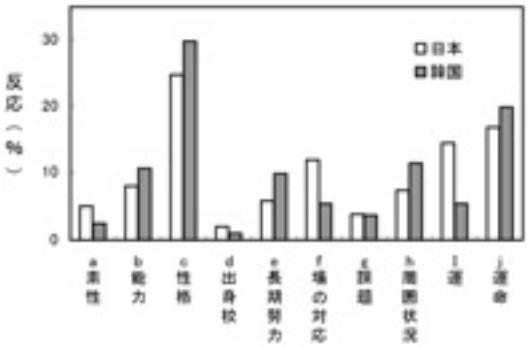

図７　恋愛における自分自身の成功の帰属

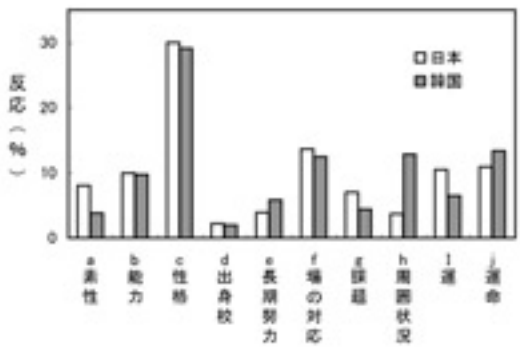

図８　恋愛における自分自身の失敗の帰属

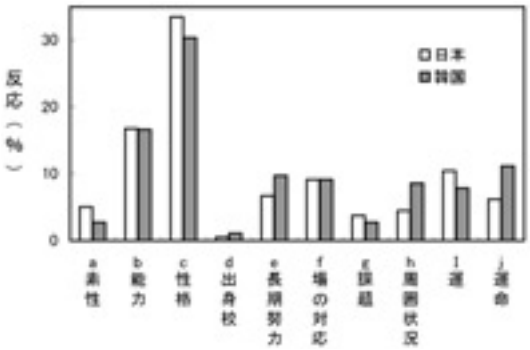

図９　恋愛における好きな友達の成功の帰属

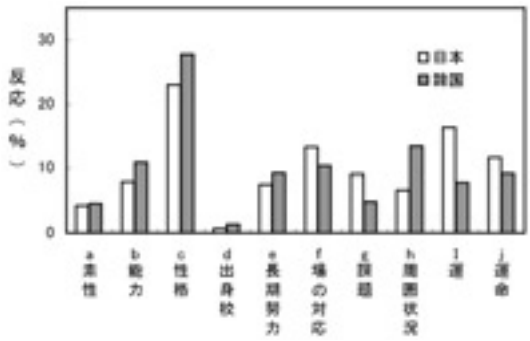

図10　恋愛における好きな友達の失敗の帰属

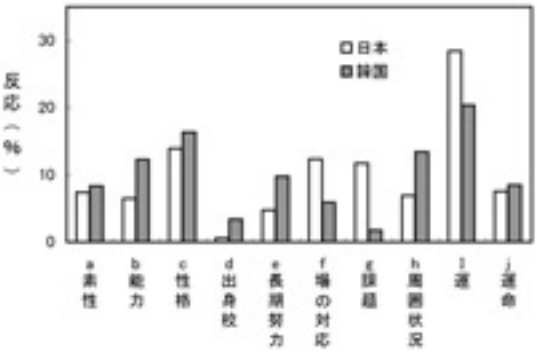

図11　恋愛における嫌いな人の成功の帰属

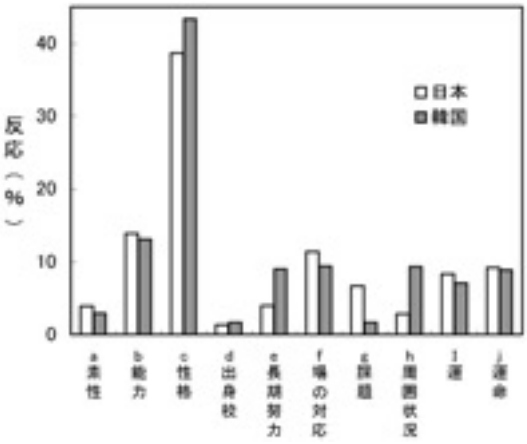

図12　恋愛における嫌いな人の失敗の場合

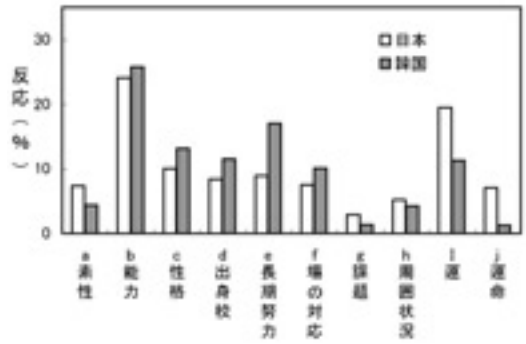

図13　就職における自分自身の成功の帰属

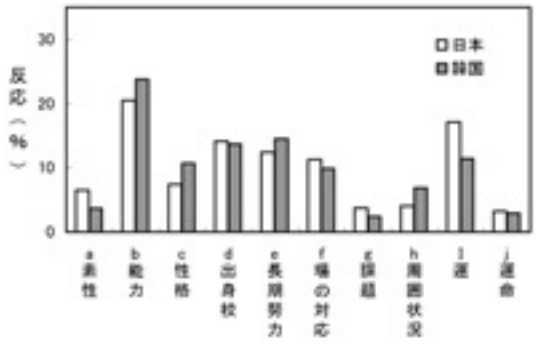

図14　就職における自分自身の失敗の帰属

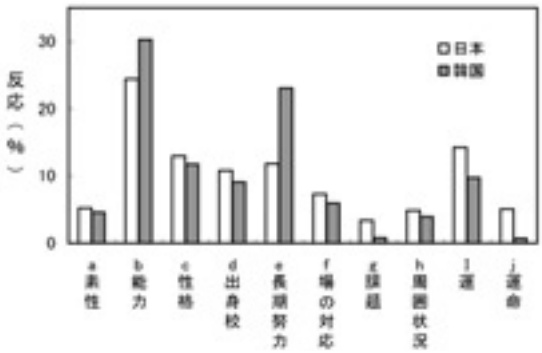

図15　就職における好きな友達の成功の帰属

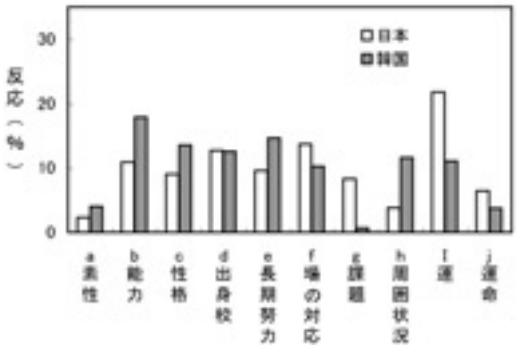

図16　就職における好きな友達の失敗の帰属

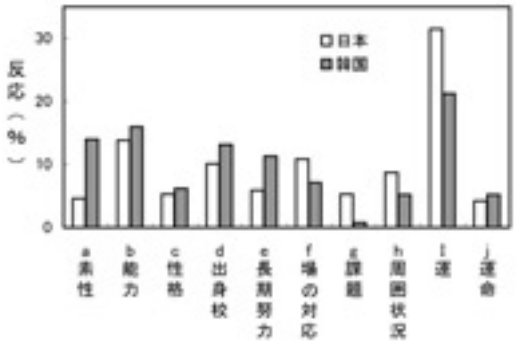

図17　就職における嫌いな人の成功の帰属

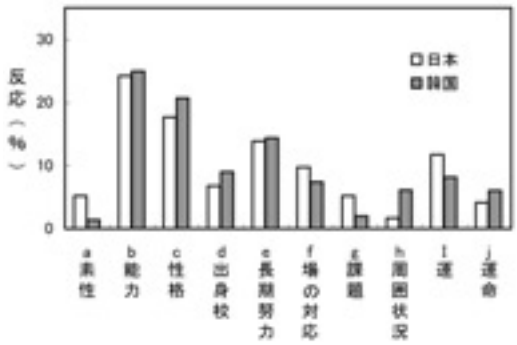

図18　就職における嫌いな人の失敗の帰属

考　察

帰属錯誤の従来の研究においては、原因帰属をするプロセスで、自己高揚動機から自己奉仕バイアスが生じるとされている（Load, C. G. 1997）。しかし、近年、帰属傾向の比較文化心理学的研究の知見から帰属の自己奉仕バイアスには文化相対性がみられ、必ずしも自己高揚的帰属傾向が普遍的であるとは言えないことが明らかにされている。個人主義、資本主義、キリスト教を素地とする西欧文化においては、社会生活全般において自己高揚することが、強く動機づけられているために、帰属理論においても自己奉仕的バイアスが強く生じ、自分の成功については、内的、安定的な要因たとえば能力などに帰属し、自分の失敗については外的で不安的な要因たとえば運などに帰属し、また、他者の成功については、外的で不安的な要因に帰属し、他者の失敗については、内的で安定した要因に帰属する傾向があるとされている。これにより、人は自らの自尊心の維持と高揚をはかっているとされ、そのことが実験的に証明されている。他方、日本人においては、序で述べたように原因帰属において、自己高揚とは対照的な自己卑下傾向がみられるとされている。その理由として、日本は集団主義的、伝統的文化を素地とするアジア文化圏の一員だからとされている。

そこで、本研究では、同じアジア文化圏の一員である韓国と日本の大学生を被験者において指摘されているような傾向がみられるかどうかを再検討し、同時に同じアジア文化圏ではあるが、日本、韓国ともに各々独自の長い歴史と文化を持っていることから、日本と韓国の間の文化差による帰属傾向に差があるかどうかについても検討した。

本研究において、帰属傾向には、西欧・非西欧という文化による帰属傾向の一貫性以前に、同一文化内においても、同一者においても、文化差よりも、まずは、判断する課題内容の要因が極めて大きな影響を及ぼすことが明らかにされた。北山・高木・松本は、「成功を運や課題に帰するという自己批判傾向は、便宜的実験課題を用いた研究では強いものの、現実場面の成功を調べた研究ではみられない。むしろ、努力が重視されている」とし、課題内容による帰属傾向の違いを指摘している。その上で、日本人の帰属傾向を「総じて成功、失敗とかかかわらず、努力への帰因が顕著である」としている。

実際、古脇（1980）によれば、大学生は、試験の成績を成功・失敗にかからず努力要因に帰因しているとしている。このような現実課題においては、自己卑下的帰属傾向は見られないというのが北山・高木・松本の指摘である。

しかし、本研究の調査は、＜結果＞で詳述したようにこの知見とは相対する結果を示している。日本の大学生にとってきわめて現実的課題である大学入試試験の結果について、明確に自己卑下傾向が確認されたのである。大学入試の成功の原因として、運がよかったことに最も多く帰因し、しかも群を抜いて多く、運に帰因していることが明らかにされた。日本人は現実課題に対しても、その課題の性質により、明らかな自己卑下傾向を示すことが分かった。運に続いて二番目に帰因が多かったのが長期的努力であった。これは、従来の知見に合致しており、努力を重視する日本人の帰属傾向が追証されたといえる。一方、韓国の大学生は大学入試の成功の原因は長期的努力が第一の帰因理由である。日本人に比べ、自己高揚的であり、二番目に運に帰因しているが、これにより、同じアジアの一員ではあるが、日韓には帰属傾向に差があり、韓国人は、日本人ほど自己卑下的帰属傾向がないことが明らかにされた。この傾向は、一般的に言われている韓国人の自尊感情の高さによるといえるのかもしれない。ただ、日韓に

共通していえることは、運への帰属の高さと努力への帰属の高さである。これは欧米における成功の原因を内的で安定した要因の能力に帰因する傾向とは対照的であることが分かる。基本的帰属錯誤といわれる相応性バイアスが、非西欧文化のアジアの一員である日本と韓国の両国において、欧米のようには見られなかったことは、相応性バイアスが普遍的ではなく、文化差があること、相応バイアスが西欧文化において生じやすく、アジア文化圏においては生じにくいことが実証されたといえよう。このことは、西欧文化においては、自己高揚的傾向があり、アジア文化においては、自己卑下的傾向があることを示しているともいえる。

大学入試の失敗の原因帰属については、日本、韓国ともに一番に長期的努力に帰属している。つまり、自分の努力不足により入試に失敗したとしている。これは、従来の西欧での帰属研究において主張されている帰属錯誤傾向とは明らかに異なっている。従来の研究では、失敗した場合の帰属傾向は、失敗からの自尊心の低下を防衛するために自己奉仕的バイアスが生じて、失敗の原因を外的な要因に帰属する傾向にあるとしている。今回の調査結果はこの帰属傾向とは対照的な結果を示している。これは、日韓両国の大学生に自己卑下的、あるいは自己批判的帰属傾向が高いことを示し、失敗を内的要因に強く帰属していることが明らかにされている。このことから、失敗における帰属傾向には大きな文化差があることが明らかにされたといえる。ただし、この日韓の失敗の内的要因への帰属は、単なる自己卑下、自己批判ではなく、それが自己向上に結びつくような帰属傾向であることは、帰属が、内的で安定的な能力ではなく、内的でも、不安定的な要因、つまり、自分で次回、改善できる要因に帰属していることからうかがえる。このことは、北山忍・唐澤真弓（1995）により指摘されている。「欧米人は自己の望ましい属性（能力、才能）を肯定的に評価しようと動機づけられているのに対して、日本人はまず自己批判的に自己の望ましくない属性を見いだし、これをなくするよう、実際の行動でそれに努めるように動機づけられている。つまり、欧米人の自己実現は自己高揚によっているのに対して、日本人のそれは、望ましくない属性を日常的努力を通じて解消していこうとする行為のパターン（自己向上）によっていると考えられる。」としている。今回のデータから見ると、同様のことが、韓国人にも当てはまるといえよう。その意味では、日本と韓国には共通する文化があり、そこから、共通の帰属傾向が生じているといえよう。

では、それが日韓共通文化的素地によるものであるとしたら、このような自己卑下的傾向はどのような場面でも生じることになる。しかし、実際は、考察の最初に述べたように、大学入試以外の課題では日本、韓国ともに、異なった帰属傾向を見せているのである。本研究においては、帰属傾向は課題による差異が大きいことが示されている。本研究で大学入試の次に課題としてとり上げているのはこれも現代の大学生にとって最大関心事である恋愛の成否である。日韓学生の恋愛の成否の帰属傾向を分析してみると、大学入試の帰属傾向とは全く異なることが明らかになった。自分自身の恋愛においては、自分の恋愛の成功も失敗も原因は第一に自分の性格にあると帰因している。性格は内的で安定した帰属要因である。欧米的自己奉仕的バイアスにおいては、成功は内的・安定要因に帰因されるとされ、その点では、この日韓の帰属傾向は欧米と合致するかに見える。しかし、欧米的自己奉仕的バイアスにおいては、失敗は外的・不安的要因に帰因されるとされるが、結果が示すように、本研究の日韓の帰属傾向は内的・安定的要因への帰属となっており、明らかに、正反対である。この日韓大学生の結果は、成功においても失敗においても性格に帰因しているので、自己奉仕的バイアスによる帰属とはいいがたい。むしろ、

これは基本的帰属結果といわれる相応性バイアスといえる。つまり、日韓の学生は、恋愛の成否については、内的要因を割増し、状況的要因を割引し、個人的要因を強調しすぎる帰属錯誤傾向を示しているといえる。ここでは、非西欧文化と比べ西欧文化に強くみられるとされている相応性バイアスが非西欧文化であるアジアの日本と韓国の学生にはっきりとみられたといえる。学力においては、努力を評価する社会であるが、恋愛においては、努力よりも性格を評価する文化をもっているといえるのかもしれない。

次に、三番目の課題として取り上げた就職についての帰属傾向をみると、ここでも、課題による帰属傾向の違いが浮き彫りにされてくる。就職については被験者が大学１、２年生ということから、実際には経験していないことなので想像での回答となっている点に問題があるが、最近の日本韓国両国の就職事情からみれば、１、２年の学生といえども、いずれ直面する問題として、日頃、考えている重要な課題であることは確かであるといえよう。さて、その就職の成否の帰属傾向であるが、結果に詳述したように、就職の場合、成功したときも、失敗したときも、第一に自分の能力あるいは能力不足に帰因された。この傾向は大学入試の努力要因、恋愛の性格要因とはまた違った帰属傾向であることが明らかにされた。恋愛の場合は、同じ、内的安定的要因ではあるが、性格帰因されたが、就職の場合は能力に帰因された。ただ、両方とも個人の内的で安定的な要因への帰属である点は同じ傾向である。就職の成功への帰属傾向が西欧的自己奉仕バイアスではないことは、成功だけでなく、失敗においても内的で安定的な自らの能力不足に帰因していることからわかる。そして、就職の課題でも、非西欧文化にもかかわらず日韓の両学生において状況的要因を割り引き、個人的要因を割り増して帰属する相応性バイアスがみられることが明らかにされた。このことから、日本の帰属研究の従来の知見では、日本人は、成功しても、失敗しても努力要因に帰因する傾向が強く、ここから努力重視の文化的素地がみられるとされてきたが、一概にそうは言えないことが明らかにされたといえよう。確かに、本研究の大学入試の帰属傾向をみると、その傾向ははっきりとうかがえる。しかし、課題の異なる恋愛や就職の帰属傾向をみると、そのまま努力重視文化とはいえなくなる。本研究からいえることは、大学入試など学業面に限定された範囲では努力が重視される文化であるといえよう。

さて、本研究では自分自身への帰属だけでなく、他者（好きな友達と嫌いな人）への帰属も調査している。これにより、相互依存的自己をもつアジア文化圏における他者称賛帰属を通しての自己高揚をはかるという自尊心維持のストラテージについて検討することが可能になる。ただし、ここでも課題による帰属傾向の差異が大きいことが結果に示されているので、課題別にみていく。大学入試では他者称賛が明示された。好きな人の成功は、日韓両国とも努力と能力に帰され、個人を称賛する帰属がなされ、嫌いな人の成功は、外的不安定要因である運に第一に帰因された。また、失敗については、好きな人の場合、運と努力に、嫌いな人の場合は、能力と努力つまり、能力不足と努力不足に帰因された。このような帰属傾向は明らかに、好きな人（好意者）には奉仕的バイアス、嫌いな人（嫌悪者）には蔑視的バイアスがあるとみれるといえる。これは日韓両学生にみられる傾向であるが、特に日本の学生において、より強く好意者称賛、嫌悪者蔑視の帰属傾向がみられた。これは、日本の学生は他者称賛を通して自己高揚をはかる傾向がより強いということができるかもしれない。

好意者を称賛し、嫌悪者を蔑視する帰属傾向は、課題の異なる恋愛や就職の課題においても日韓両国にみられ、またその傾向は日本人に、より強くみられた。好意者が恋愛に成功したときは、当人の性格

に帰属している。つまり、性格が良いから、成功したと考えてる。これは称賛的帰属といえよう。しかし、嫌悪者が恋愛に成功した場合は、運に帰属し、たまたま運が良かったとし、逆に、失敗したときは極めて高く性格に帰属している。つまり、性格が悪いから失敗したと考えてるといえる。これは蔑視的帰属といえよう。就職についても好意者の成功は能力（韓国の場合は能力と努力）に帰属し、能力があったから成功したとし、他方、好意者が失敗した場合、日本人は、能力不足よりも運が悪かったことに帰因している。嫌悪者が就職に成功した場合は、運に帰属し、たまたま運が良かったと考え、失敗した場合はその原因を能力と性格に帰属している。つまり、能力がなく、性格が悪いために失敗したと考えている。これはかなり明白な好意者称賛、嫌悪者蔑視の帰属バイアスといえよう。

そのような帰属バイアスを生む根底には他者評価を通しての自己高揚動機が推察できる。日本のような相互依存的で他者高揚的な社会においては、単純に自分を高揚させるような帰属傾向は、他の成員から評価されず、かえって評価をさげられてしまう。このため自分については自己卑下的傾向を示し、好意的他者に対して称賛を行い、自分と友人というグループの高揚をはかり、自己高揚していく。同時に嫌悪者を蔑視することにより、相対的自己高揚していくという自尊心維持のメカニズムをとっていると考えることができる。本研究によりこの傾向は、同じアジアの一員である韓国の学生においてもみられることが分かったが、課題により異なるが、この傾向は総じて、日本人の方がより強いことが明らかにされたといえる。日本人の方がより人間関係に敏感であるといえるかもしれない。それだけ人間関係のストレスが大きい社会に住んでいるといえるのかもしれない。

本研究の実施にあたり、金永権氏、金成恩氏に協力戴いた。記して感謝したい。

文　献

Brown, J. D., & Rogers, R. J. (1991). Self-serving attributions : The role of physiological arousal. Personality and Social Psychology Bulletin, 17, 501-506.

Campbell, W. K., & Sedikides, C. (1999). Selfthreat magnifies the self-serving bias : A meta-analytic integration. Review of General Psychology, 3, 23-43.

Cialdini, R. B., Borden, R. I., Thorne, A.,Walker M. R., Freeman, S., & Sloan, L. R. (1976). Basking in reflected glory : Three (football) field studies. Journal of Personality and Social Psychology, 34, 366-375.

Choi, I., & Nisbett, R. E. (1998). Situational salience and cultural differences in the correspondence bias andactor-observer bias. Personality and Social Psychology Bulletin, 24, 949-960.

遠藤みゆき・齊藤　勇 (1999). 大学生の大学入試・恋愛・就職の原因帰属　日本カウンセリング学会第32回大会発表論文集

Fletcher, G. J. O., & Ward, C. (1988). Attribution. theory and processes. A cross-cultural perspective. In M. H. Bond (Ed.), The cross-cultural challenge to social psychology. Sage Publications.

Franzoi, S. L. (2003) Social psychology. McGrawHill.

Fraser, C. & Buchell, B. (2001). Introducing social psychology. Polity.

古城和敬 (1980) 成功・失敗の原因帰属に及ぼす public esteem の効果　実験社会心理学研究, 20, 23-

34.

Gilbert, D. T., & Malone, P. S. (1995). The correspondence bias'. Psychological Bulletin, 117, 21-38.

Greenberg, J., Pyszczynski, T. A., & Solomon, S. (1982). The self-serving attributional bias: Beyond self-pre-sentation. Journal of Experimental Social Psychology, 18, 56-67.

Heider, F. (1958). The psychology of interpersonal relations. Wiley.

Heider, F. & Simmel, M. (1944). An experimental study of apparent behavior. American Journal of Psychology, 57, 243-259.

Jones, E. E. & Davis, K. E. (1965). From acts to dispositions : The attribution process in person perception. In L. Berkowitz (ed.), Advances in experimental social psychology. vol. 2. Academic Press.

Jones, E. E. (1990). Interpersonal perception. W. H. Freeman.

Kelley, H. H. (1967). Attribution theory in social psychology. In D. Levine (Ed.), Nebraska Symposium on Motivation. vol. 15. University of Nebraska Press.

北山　忍・高木浩人・松本寿弥 (1995). 成功と失敗の帰因：日本的自己の文化心理学　心理学評論, 38, 247-280.

北山忍・唐澤真弓 (1995). 自己：文化心理学的視座　実験社会心理学研究, 35, 133-163.

小菅幸一 (2002). 韓国大統領五話　朝日新聞 (11/６)

Lee, Y. T., & Seligman, M. E. P. (1997). Are Americans more optimistic than the Chinese? Personality and Social Psychology Bulletin, 23, 32-40.

Lord, C. G. (1997). Social psychology. Harcourt brace.

Markus, H. R.,& Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review, 98, 224-253.

Miller, A. G.,Jones, E. E., & Hinkle, S. (1981). A robust attribution error in the personality domain. Journal of Experimental Social Psychology, 17, 587-600.

Miller, C. T. (1984). Self-schema, gender, and social comparison: 4 clarification of the related attributes hypothesis. Journal of Personality and Social Psychology, 46, 1222-1229.

Miller, S. A. (1995). Parents' attributions for their children 's behavior. Child Development, 66, 1557-1584.

Mullen, B., & Riordan, C. A. (1988). Self-serving attributions for performance in naturistic settings: A meta-analytic review. Journal of Applied Social Psychology, 18, ３-22.

村本由紀子・山口　勧 (1997). もう一つの self-serving bias―日本人の帰属における自己卑下集団奉仕傾向の共存とその意味について―実験　社会心理学研究, 37, 65-75.

Myers, D. G. (1999). Social psychology. McGrawHill.

Nisbett, R. E., & Ross, L. (1980). Human inference: Strategies and shortcoming in social judgement. Prentice-Hall.

Oakes, P. J. & Turner, J. C. (1980). Social categorization and intergroup behavior : Does minimal intergroup discrimination make social identity more positive? European Journal of Social

Psychology, 10, 295-301.

Ross, L. (1977). The intuitive psychologist and his shortcomings: Distortions in the attribution process. In L. Berkowitz (Ed.). Advances in experimental social psychology. vol.10. Academic Press.

齊藤　勇・荻野七重（1997）. 運と運命への帰属　日本応用心理学会第64回大会発表論文集

齊藤　勇・遠藤みゆき（1999）. 日韓の帰属過程の比較文化心理学的研究－大学生の入試・恋愛・就職の成功・失敗について－　日本性格心理学会第８回大会

齊藤　勇・遠藤みゆき・荻野　七重（2000）. 大学生の現実的課題の成功・失敗の帰属傾向－大学入試・恋愛・就職の原因帰属－　立正大学文学部研究紀要、16、１-22.

Storms, M. D. (1973). Videotape and the attribudon process:. Reversing actors' and observers' points of view. Journal of Applied Social Psychology, 27, 165-17.

Silvia, P. J., & Duval, T. S. (2001). Predicting the interpersonal targets of self-serving attributions. Journal of Experimental Social Psychology, 37, 333-340.

鹿内啓子（1983）. 他者の成功・失敗の因果帰属に及ぼす self-esteem の影響. 実験社会心理学研究, 23, 27－37.

高橋　徹（2003）. グローバルな価値観形成へ向けて、Human Studies, 30, 9-12.

Taylor, J., & Riess, M. (1989). "Self-serving" attributions to valenced causal factors: A field experiment. Personality and Social Psychology Bulletin, 15, 337-348

Waston, D. (1982) The observer: How are their perceptions of causality different? Psychological Bulletin, 92, 682-700.